

17 気道閉塞と全周性の食道粘膜剥離をきたした塩化ベンザルコニウム中毒の1例

本田 博之・関口 博史・宮島 衛
田中 敏春・熊谷 謙・廣瀬 保夫
飯沼 泰史・山崎 芳彦

新潟市民病院救急救命センター

【緒言】塩化ベンザルコニウム服用により気道閉塞と全周性の食道粘膜剥離をきたした症例を経験した。

〔症例〕90歳男性，来院時気道は開通していたため気管挿管は行わず，ステロイドの投与と誤嚥性肺炎に対する治療を行うこととした。

【経過】経鼻胃管を挿入できず断念した。入院20時間後に気道狭窄の所見が著明となり気管挿管した。上部消化管内視鏡で全周性の食道粘膜剥離を認めた。9日間の挿管管理と22日間の絶食を要した。

【考察】塩化ベンザルコニウムは粘膜障害作用から急激に気道閉塞をきたしうる。また，食道粘膜損傷が重篤な場合は治療手技が危険でさえありうる。

【結語】腐食性薬剤の服用例では物理的損傷の程度を早期に精査し，治療方針を決定する必要がある。

18 気道熱傷の喉頭浮腫の表あとしての経時的頸部エコーの有用性

肥田 誠治・大橋さとみ・本多 忠幸
山本 智・木下 秀則・風間順一郎
遠藤 裕

新潟大学医歯学総合病院救急集中治療部

全身熱傷に伴う気道損傷の評価方法として，頸部エコーにより喉頭蓋の経時的変化をモニターした症例を経験したので報告する。

測定は10MHzのリニアプローブで行い，水平断で評価した。

症例1は23歳男性で，2度28%の全身熱傷症例であった。入院後挿管し人工呼吸管理となった。入院後5時間後の喉頭蓋前後計は0.35cmで男性正常値の0.2cm以下になるまで6日間を要した。

症例2は23歳女性で2度15%の全身熱傷であった。入室時から，女性正常値の0.15cm以下で推移し，気道管理を要しなかった。以上から，経時的な頸部エコーによる気道評価は，非侵襲的で気道評価法の一つとして有用ではないかと考えられた。

19 昨年の中越地震における災害医療を経験して

藤岡 斉・野田 宗慶・国分誠一郎
柁木 永・海老根美子・田中 剛

長岡赤十字病院麻酔科

II. 特別講演

「循環器麻酔科医最前線 — 循環を科学し，護り，そして拓める」

北里大学医学部麻酔科学教室助教授

岡本浩嗣